新・下野市風土記　続続　歴史上の三悪人？

下野市教育委員会　文化財課

10月号と11月号で、足利尊氏と平将門について記しました。後の世の評価は必ず様々なのは世の常で、その当事者は我を忘れ、本当の意味で命をかけ成すべきことを成した事と思われます。後の歴史研究者がどんなに研究してもその時々の当事者の気持ち、考えは図り知ることはできません。「性善説」的な思考では、悪事は成功しないこととなります。

前の2名とともに道鏡も悪人だったのでしょうか？5年前に「敗者の日本史」というシリーズの本が出されました。この特集に『奈良朝の政変と道鏡』（瀧浪貞子氏）があります。その序章の文から改変引用。『続日本紀』宝亀元（770）年8月17日条「孝謙天皇時代は恩情ある裁判や刑罰を行い倹約政治が行われていたが、称徳天皇時代（孝謙天皇が重祚し称徳天皇となります。よって同一人物。）になると道鏡が権力をほしいままにして、盛んに寺院などの土木工事を行い、そのために官民は疲れ、国家財政は窮乏し、裁判も厳しくなり、やたらと人を処刑した」とあり、「道鏡を「権力者」＝「悪人」とみる道鏡観は、すでに『続日本紀』が編さんされた桓武朝期において、その原型ができあがっていた。」ともまとめられています。

確かにそれから2～30年後に成立した『日本霊異記』には、道鏡と称徳帝の関係について散々な書きぶりがされています。「『日本霊異記』が元になり、鎌倉期の『古事談』や『愚管抄』で虚実ないまでにされ、後に道鏡を「怪僧」・「妖僧」と印象付けた」とも瀧浪先生は記されています。

道鏡は、平城京の西寄りに西大寺、西隆寺という二大寺を造営します。称徳帝の両親（聖武天皇・光明皇后）が仏教への篤い信仰の結晶として東大寺を造営します。それに倣い、称徳帝は西大寺を建立します。今風に表現すると称徳帝は、両親をリスペクトしており、自分も少しでも両親に近づきたいと考えていたのかもしれません。そこで、アドバイスしたのが恐らく道鏡だったのでしょう。

この頃の状況は、７５２年にやっと東大寺大仏の開眼供養が終わり、７５６年には聖武天皇が崩御。７５９年には唐招提寺を建立し、さらに近江保良宮の造営を開始。７６０年には光明皇太后が亡くなります。叔母である光明皇太后の信任を得て、人臣として史上初の太師（太政大臣）まで登りつめ、事実上の最高権力者となった藤原仲麻呂（藤原恵美朝臣押勝）の権勢に陰りが見えだし、反藤原勢力が動き出します。また悪いことに孝謙帝が病気になります。この病気を看病し快癒に尽力したのが道鏡となります。これを契機に、孝謙帝が道鏡を信任するようになったと伝えられています。藤原仲麻呂（恵美押勝）は、淳仁天皇を通じて孝謙帝に道鏡の寵愛を止めるよう諫めましたが、逆に孝謙帝が激怒してしまいます。天平宝字６（７６２）年６月３日、孝謙帝は出家して尼となりますが、同時に政権を二分する宣言を出します。

「但し政事は、常の祀小事は今の帝行い給へ。国家の大事賞罰二つの柄は朕行はむ。かくの状聞きたまへ悟れと宣りたまふ御命を衆聞きたまへと宣る」とのたまふ。『続日本紀』。（以下概略）「淳仁天皇は恒例の祭祀などの（国政に関係のない）小事をしなさい。国家の根幹に関わる大事と賞罰などに関する取り決めは、自分（称徳帝）が行う。皆、徹底して私の云うことを聞くように」と記されています。この宣言の背景に道鏡の姿が見え隠れしていたようです。孝謙帝は、平宝字７（７６３）年９月には道鏡を少僧都（僧位では２番目、僧官位では６番目）に任じています。一介の沙弥に過ぎない道鏡が少僧都に進むのは異例の事だったはずです。（続く）